

テアル構文と受動表現(ラレテイル)との使い分け —結果を基に動作が行われたと推論することによる制約—

齋 藤 茂

1. はじめに

テアル構文の先行研究は、大きく二つの観点から考察されている。一つは対象という意味役割を担う名詞(句)がガ格で示されるテアル構文とヲ格で示されるテアル構文との意味的・統語的な違いについての考察である。先行研究の多くは、この対象の格表示を基準に分類しており、益岡(1987)では、このテアル構文(益岡ではテアル表現)のうち対象をガ格で示すものをA型、ヲ格で示すものをB型とし、A型は対象の状態を表現する「対象指向性」を持ち、B型は、対象の状態とともに行為にも重点を置く「行為指向性」を持つとしている。

もう一つの考察は対象をガ格で示すテアル構文と受身のラレル+テイルという形式との類似性についての考察である。本稿は、現代日本語のいわゆるテアル構文と類似性が指摘されているラレル+テイルという形式の受動表現との使い分けの基準を明らかにすることを目的とする。なお、本稿では、このラレテイルを受動表現と表記する。

受動文は多くの言語に見られ、他動詞の対象である名詞(句)がガ格で示さ

れ、動作主が必須要素ではなくなる。対象がガ格で示されるテアル構文も他動詞が用いられ、対象である名詞(句)がガ格で示され、後述するように動作主が表示ができないという、統語的な共通点がある¹。さらに、意味的にも以下に示す(1)のようにそれぞれ入れ替えてもほとんど違いがない。一方、対象をヲ格で示すテアル構文は、(2)のようにヲ格をガ格に変えて置き換えをすると意味が変わる。

- (1) a. 棚の上にはお母様の家族の写真が飾っております。

(萩原浩「お母様のスープ」『仕掛けられた罪』)

- b. 棚の上にはお母様の家族の写真が飾られています。

- (2) a. 「由美子さんには、わたしが彼女の意見に与しないということをははっきりと伝えてあります。」 (宮部みゆき『模倣犯(4)』)

- b. #「由美子さんには、わたしが彼女の意見に与しないということがはっきりと伝えられています。」

(#は、文法的ではあるがもとの文と主語が異なり意味が異なることを示す)

例文(1)のように対象をガ格で示すテアル構文のテアルをラレテイルと置き換えができることから、野村(1987)では、この置き換えテストを対象がガ格やヲ格で示されないテアルの分類に用いて、置き換えができれば、対象がガ格で示されたテアル構文と、できなければ対象がヲ格で示されるテアル構文と同じ性質を持つものであると分類している。

本稿では、この類似した表現である、対象がガ格で示すテアル構文と受動表現との使い分けの基準が何であるかを明らかにすることを試みる。なお、3.1節で示すように、本稿ではラレテイルに置き換えられるテアルをⅠ型、置き換えができないテアルをⅡ型として表記する。このⅠ型のテアルが用いられたテアル構文と受動表現との相違点については、事態の把握の仕方という観点から考察を試みる。考察にあたり、2000年代を中心とした小説・新書・

¹ テアル構文と受動表現との類似性については、寺村(1984)や益岡(1987)など数多くの先行研究が指摘している。

ブルーボックスなどをコーパス化した110品とコーパス化していない2作品の計112作品(87名の著者)から集めた、テアル(デアル)の用例1398例を用いた。デジタル化した110作品に正規表現を使い収集し、デジタル化していない2作品では目視で検索した²。

2. 先行研究の分析

本稿の考察対象は、1節で触れたように、受動表現との類似したI型のテアル構文を考察対象とする。I型のテアル構文と、受動表現との類似に関する先行研究の分析を簡単に見ておく。まず、寺村(1984:148)は、対象をガ格で示すテアル構文と受動表現との使い分けは、どちらもその対象の状態が外部からの力、作用によるものと捉えられた場合に用いられるとし、その外部からの力、作用が人の意図をもってした作為である場合にはテアルが用いられるとしている。さらに、以上の原則に加え、動詞に自他の対立がある場合、自動詞が他動詞の作用の結果の現象であるか、描こうとしている事態が、尋常であるか異常であるかという要素がからんで選択されるとしている(p.148)。

この意図的な行為であるか否かという指摘を、より細かく分析したものに、金水(2009)がある。金水(2009:276-279)は、以下のような文から、対象をガ格で示すテアル構文は、単に結果状態を示すだけでなく、行為が行われる理由の存在が明らかな場合に適切となると指摘している。

- (3) ?本が**散らかして**ある。
- (4) ?鍵が**壊して**ある。 (金水 2009:276、(10b)(10c))

金水(2009:276)は、これらの例文は、適切な文脈の中に埋め込めば、適切性が増すが、そのような文脈がなければごちない文であるとし、適切になるためには、まず眼前の状態が動作主にとって望ましい事態でなければならないとした。さらに、文の適切性が増すためには意志性が必要であるとしてい

² 考察に用いた資料の明細については、資料(1)を参照。

る(p.277)。金水は、意志的行為について「次に何かをするため」あるいは「次に何かを起こすために」行うのが通常であり、テアル構文にはこの意志性があるとしている。つまり、金水の意志性2とは、人の意志的行為には、何らかの理由や目的などがあり、その行為を行った人の理由・目的を遡って結果から読み込みこまれたもののことであると考えられる。その上で、金水(2009:280)は、この意志性という意味をなくしたいときのために、サレテイル構文や自動詞+テイル構文があるとしている³。

- (5) ?鍵が壊してある。
- (6) 鍵が壊されている。
- (7) 鍵が壊れている。 (金水 2009:280 (26a) (26b) (26c))

金水(2009)は、このようにテアル構文に意志性を認めた上で、このテアル構文の意志性を3つに分類しそれぞれ、意志性1、意志性2、意志性3としている。金水の言う意志性1とは、動詞が意志動詞であること、すなわち意志的行為を表す動詞が持つ語彙的な意味での意志、意志性2は、上で述べた人の意志的行為には、動作を行う人には何らかの理由や目的があることからその行為を行うにあたっての意図を指す。意志性3は、テアル構文で発話する現場で読み込まれる語用論的なものとしている。このように意志性を定義した上で金水はI型のテアル構文には、この意志性1及び意志性2があるとしている。このように、テアル構文には意志性があると考えると意志性がないと捉えられるテアル構文が問題となる。この点については、4.2.1で論じる。

3. 置き換え可能なI型のテアル構文の特徴

受動表現との比較を行うために、まずI型のテアル構文の特徴を見てみる。

³ 金水(2009:280)のサレテイル構文とはここで取り上げた例文や「割られている」「壊されている」「掛けられている」などが用いられた文を「サレテイル構文」として挙げており、本稿での受動表現と同じものであるといえる。

この特徴を踏まえた上でI型のテアル構文と受動表現との使い分けを論じる。

3. 1 I型のテアル構文

既に、1節で触れたように、先行研究ではテアル構文の考察は主に対象がガ格・ヲ格で示されたものを扱ってきた。しかし、テアル構文には対象がガ格・ヲ格以外にも様々な形式のテアル構文がある。例えば、以下に示すように引用の「と」で対象に相当するものが示されているテアル構文があり、これは格表示では分類できないが、置き換えテストによって2つに分類することができる。この性質を利用して、野村(1983)や原沢(2004)は、様々な形式のテアル構文の分類を行っており、本稿でも、以下のように置き換えができるものをI型のテアル構文と同じ性質を持つテアル構文とし考察を進める⁴。

- (8) a. 差出人のところには、同じ文体で「明美」とだけ書いてあった。
(宮部みゆき『模倣犯1』)
- b. 差出人のところには、同じ文体で「明美」とだけ書かれていた。
- (9) a. 社員たちには、社長は海外視察中だと説明してある。
(東野圭吾「偽装の夜」『探偵倶楽部』)
- b. #社員たちには、社長は海外視察中だと説明されている。

テアルをラレテイルと置き換えると、(8b)は元のテアル構文と意味的にはほぼ同じであるが、(9b)は意味的には異なる。格表示を基準に使うと分類できない引用の「と」が用いられるテアル構文の分析を行うことが、テアル構文全体の違いを理解するために役立つと思われるので、この「と」が用いられたテアル構文の分析から始める。

3. 2 確認した結果からの推論と動作の直接確認

齋藤(2009)がコーパスで調べた結果、この引用の「と」が用いられたテアル構文のうち置き換えのできるテアル構文に用いられている動詞は、(8)の

⁴ 原沢は、すべてこの置き換えテストで分類をしているわけではなく、「は」などで示されたテアル構文の分類では、文脈などから分類している。

「書く」以外に、「描く」「記す」「張り出す」「印字する」などがあり、置き換えのできないテアル構文には、(9)の「説明する」以外に「言う」「願ひする」「決める」などがある⁵。

- (10) a. 入り口の掲示板に、今週の土曜日に「折り紙教室」が開催されると張り出してある。 (宮部みゆき『楽園 上』)
- b. 入り口の掲示板に、今週の土曜日に、「折り紙教室」が開催されると張り出されている。
- (11) a. 裏返して差出人のところを見ると、小さく歪んだ文字で「母より」とだけ記してあった。 (宮部みゆき『模倣犯 5』)
- b. 裏返して差出人のところを見ると、小さく歪んだ文字で「母より」とだけ記されていた。
- (12) a. この若者が来たら連絡をしてくれって、お願いしてあったんだ。 (伊坂幸太郎『重力ピエロ』)
- b. # この若者が来たら連絡をしてくれって、お願いされていたんだ。
- (13) a. しかし、圭子には帰るまで連絡しないと決めてあった。 (有川浩『空の中』)
- b. # しかし、圭子には帰るまで連絡しないと決められていた。

例文 (10a) (11a) は置き換え可能であり、(12a) (13a) はできない。この引用の「と」が用いられたテアル構文が2つの類型に分かれる要因として、まず動詞にあると考えられる。置き換えのできる前者のグループの動詞は、いずれも視覚的に確認できる動作の結果がある動詞であり、後者は、視覚的に確

⁵ ここで行った置き換えテストの結果が、対象がガ格・ヲ格で示すものという2分類と同じであることは、動詞「書く」は、「と」以外の場合、ヲ格を取るが、テアルが用いられることでガ格も取る。同様に動詞「言う」もヲ格を取るが、テアルが用いられることでガ格も取る。従って、ガ格・ヲ格という形式面（対象の格表示）での2分類と形式面では分類できない「と」の場合の分類は同一のものであると言える。

認できる動作の結果がない動詞である⁶。視覚を通じての伝達を表す動詞が用いられた(8)(10)(11)の場合は、置き換えが可能なⅠ型のテアル構文であり、動作による結果(文字など)を基に、そのような結果を生じさせる動作が行われたと表現している。すなわち、この置き換えのできる文では、話し手が直接確認した結果から動作が行われたと話し手が推論した表現である。

一方、情報の伝達が聴覚を通じて行くことを表す動詞が用いられた(9)(12)(13)の場合は、置き換えができずⅡ型のテアル構文である。聴覚を通じての伝達は、その動作が終わった後では、その動作が行われたかを確認できるような結果はない。この表現が可能な場合としては、話し手が動作自体を確認している場合であると言える。動作を直接確認した場合とは、話し手自らの動作や、動作が行われたその場に居るか、または動作を行った者から直接報告を受けた場合に限られる。従って、このⅡ型の場合は、動作が行われたという情報を直接得た場合の表現である。

このテアルに前接する動詞が結果を生じるものであるかという語彙的な意味の違いは、引用された情報に対する動作を直接確認できるか否かという情報の確認の違いに関わり、2つの種類の違いを生むことになる。以上のことから、Ⅰ型の場合は、確認した結果から動作を推論し、Ⅱ型では動作自体を直接確認した表現であると言える。従って、このテアル構文の2つの種類の違いは、その発話にあたっての情報がどのようなものに基づくかという意味での証拠性の違いを表すと言える⁷。

3. 3 Ⅰ型のテアル構文での動作の推論

3.2節では、「と」による引用があるテアル構文では、動作が行われたこと

⁶ 結果だけではなく、次の3.3の例文(15)の説明で述べるように、その痕跡でも可能である。本稿では結果と痕跡とをまとめて結果と表記する。

⁷ 本稿での証拠性とは、発話の根拠となる情報が、話し手が動作自体を直接確認したのか、直接確認した結果から推論したものであるかという違いはあるものの根拠となる証拠があるという意味での証拠性とし、話し手にとってその情報が確かなものであることを指す。この情報の確かさを文に表現することは、選択的なものであり必須な要件ではなく、類型論などで述べられている証拠性とは異なる。

を、結果から推論したか、動作自体を話し手が直接確認したかで、2つの類型に分けられることを論じた。引用の「と」が用いられたテアル構文では、この確認の違いは主に動詞が語彙的に表す伝達方法の違いとなって現れた。ここでは、対象がガ格で示されたI型のテアル構文でも同様に動作が行われたことを結果から推論した表現であることを確認する。本稿のこの主張と関係がある指摘として、影山(1987)のI型のテアルと打撃動詞についての指摘がある。

影山(1987:186)は、対象がガ格で示されるテアル構文(本稿でいうI型のテアル構文)には、打撃・接触動詞を用いることができないと指摘している。以下の(14)のような例を挙げて、影山は、テアル構文(本稿のI型)は、行為が完了したあと何らかの結果状態が残っていることを表し、用いられる動詞は状態変化ないし位置変化を意図的に引き起こす他動詞でなければならないとしている。このことは、例えば、打撃動詞「たたく」は、動作のみを表し、「たたく」という動作によって対象(ガ格で示された)の変化・結果までは意味しないからである⁸。結果から推論して動作が行われたとするのがI型であるが、その推論に必要な結果がないために非文になるのである。

しかし、打撃・接触動詞が用いられていても、そこに何らかの結果があれば、(15)のようにテアルを用いることが可能である。このように、全ての打撃・接触動詞にテアルが用いることができないのではなく、結果を残さない打撃動詞には用いることができないのである⁹。

(14) *お父さんの肩がたたいてある。 (影山 1996:186、(110b))

(15) 釘が打ってある。

⁸ 「たたく」の場合でも、アザができるなど結果が生じるのではないかとも考えられる。しかし、アザが出来た場合の表現であれば、「アザができるほどお父さんの肩がたたいてある」となるであろう。しかし、アザはできるが、「肩」自体は変化しない。すなわち、基本的に動詞「たたく」は、語彙的に結果を意味しないため、テアルを用いると不自然になる。

⁹ 影山(1996:186)は、テアル構文は行為が完了したあと何らかの結果状態が残っていることを表すとしているが、何らかの結果状態が目に見える形で残っているとするのが正確な記述であろう。

この(15)では、釘がある場合だけでなく釘を打ちつけた跡があるといった痕跡などから、動作が行われたと話し手は推論し述べているとも考えられる。このように対象をガ格で示すテアル構文は、話し手がある物の状態を確認し、そこから、人によって何らかの動作が行われたと捉え、行われたと推論して述べる表現である。これは引用の「と」が用いられたI型のテアル構文と同様の性質を持っていると言える。逆に、そのような動作があったことを示す結果や痕跡がなければI型のテアル構文を用いることができない。

一方、対象をヲ格で示すII型のテアル構文は動作の結果が存在していても、動作そのものを確認していなければ用いることができない。この違いが表れる例として、以下のような例が考えられる。

(16) (車に戻り、フロントガラスの駐車違反の紙を見ての発言)

- a. あっ、駐車違反の紙が貼ってある。
- b. *あっ、駐車違反の紙を貼ってある。

例文(16a、b)の場合では、いずれも動作自体を見ていない。しかし、(16a)は駐車違反の紙があることで、フロントガラスに警官など誰かが貼ったのであろうという推論が成り立つ。一方、(16b)には結果があるが動作自体を確認していないので不適格な文となる。以上のように、話し手が確認した結果を基に動作が行われたと推論し述べる場合、I型のテアル構文は適格な文であり、また、動作自体を直接確認していない場合には、対象がヲ格で示すII型のテアル構文を用いると不適格な文になる。

次に、動作の結果として視覚的に確認できる変化がない動詞の場合を見て確認してみる。

- (17) a. *「見込みのある子がいたんでね、ためしに店が任してある。……」
 - b. 「見込みのある子がいたんでね、ためしに店を任してある。……」
- (森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』)

例文(17)では、従業員に店を任しただけでは、ガ格でしめされた名詞(店)

自体に変化が生じるわけではないので、I型(17a)では非文となる¹⁰。一方、II型のテアル構文(17b)は、行われたその動作自体を話し手が確認している場合、すなわち動作主が話し手自身、あるいは、その動作が行われた場に居るか動作主から報告を受けて、「任せたこと」を知っていれば可能である¹¹。3.2節と本節との考察から、I型のテアル構文はある動作が行われたことを発話するにあたって、その基となる情報が、直接確認した結果から推論した情報であることを示す表現であることがわかる¹²。

4. I型のテアル構文と受動表現（ラレテイル）との比較

3節までの考察で、I型のテアル構文は話し手が直接確認した結果から推論によってそのような結果を残す動作が行われたという証拠性を表す表現であることを見てきた。この点を踏まえ、次にI型のテアル構文と受動表現との使い分けについて検討する。

4. 1 動詞の結果の有無

I型のテアル構文は確認した結果から動作を推論するため、結果が必要であるから、まず、動詞が結果を生じさせるものであるか否かの観点から受動表現との使い分けをしてみる。

4. 1. 1 確認できる結果のない動詞

I型のテアル構文は、結果が確認できる形で存在することが必要であった。しかし、受動表現では、結果は必ずしも必要ではなく、以下のように結果がない動詞も用いることができる。この場合にはテアルとの置き換えができな

¹⁰ 任せることで、店の飾り付けや雰囲気が変わるなどは、動詞「任す」の結果ではない。

¹¹ この場合、報告者は話し手にとって寺村(1984)の言う自分の差配による配下の者にあたる。

¹² 今回収集した資料でも、対象がガ格のテアル構文(453例)に用いられた動詞は多い順に「置く」98例、「書く」41例、「貼る」36例でこれらは結果を生じる動詞である。これ以外に「する」が17例と多くあったが、「ガラス張りの出入口の中から張り紙がしてある」(水恋)のように前後の文脈などから判断すると17例とも結果のある動詞と確認できる。資料(4)参照。

い。

- (18) a. 彼には、病院内の個人情報を自由に閲覧する権利が与えられている。
b. #彼には、病院内の個人情報を自由に閲覧する権利が与えてある。
- (19) a. あの会社も強請られていたってことか。
b. #あの会社も強請ってあったってことか。

上記の例文では、受動表現から、I型のテアル構文へ置き換えができない。これらは、受動表現の文中のガ格や「は」で示された名詞(句)が、動詞が表す動作によって視覚などで確認できる変化をするものではなく、結果がないため置き換えができない。また、(19)のような「も」で示された場合では、ガ格とヲ格のいずれもが想定されるが、置き換えてできたテアル構文は結果がないのでI型のテアルとしての解釈はできない。結果がない場合、受動表現からテアル構文に置き換えると文法的ではあるがII型のみ解釈になり、また3節で見たように結果のない場合のテアル構文の動作主は話し手あるいは配下になる。

以上のように、結果がない場合には受動表現は可能であるがI型のテアル構文に置き換えができない。これは、I型のテアル構文が結果を基に動作が行われたと推論する表現であることから、発話するためには結果がなければならぬが、受動表現にはそのような制限がない。また、I型のテアル構文は、結果が生じたのは人の動作によるものと推論することから、人の動作に限られるが、受動表現では自然の力によるものでもよい¹³。

- (20) (大雨による洪水で)
a. 橋が流された。

¹³ テアル構文の動作主は人に限られる、人の動作であるという指摘は、寺村(1984:148)や多くの先行研究で指摘されている。

b. *橋が流してある。

このことから、テアルと受動表現との使い分けの条件が二つ導き出される。

(条件 A) I 型のテアル構文に用いられる動詞は人の動作を表す動詞に限られ、受動表現は人の動作を表す動詞だけに限定されない。

(条件 B) 人の動作を表す動詞のうち、動詞が結果を生じない場合には、I 型のテアル構文を用いることができない。一方、受動表現は結果の有無に限らず可能である。

4. 1. 2 確認ができる結果のある動詞

4.1 節では結果を生じない動詞の場合には置き換えができないことを見た。一方、結果を生じる動詞が用いられた場合には、以下に示すように、受動表現とテアルとの置き換えが可能である。

(21) a. さほど広くない店内には外国製の調味料や食材が棚中にぎっちりと並べられていた。 (島本理生『ナラタージュ』)

b. さほど広くない店内には外国製の調味料や食材が棚中にぎっちりと並べてあった。

(22) a. それに口には歯列矯正用のブリッジがかけられている。

(池上栄一『レオキス』)

b. それに口には歯列矯正用のブリッジがかけてある。

(23) a. 紫のビニール紐は適当な間隔で枝や幹にゆわえつけられている。

(帚木蓬生『臓器牧場』)

b. 紫のビニール紐は適当な間隔で枝や幹にゆわえつけてある。

これらの例文では、いずれもガ格で示された名詞(句)が動作の結果として考えられる状態で店内、口内、枝や幹に存在している。このように動作の結果として確認できる変化があることで、「並べる」「かける」「ゆわえつける」という行為があったと推論でき、受動表現だけでなくテアルも可能であると

言える。では、結果を生じる動詞であれば、すべて受動表現と置き換えが可能なのであろうか。

これらの動詞にテイルが後接する場合は、動作の継続と結果の状態あるいは経験を表す。従って、ラレテイルのテイルが動作の継続を表すと解される場合には、テアルとは置き換えができない。テアル構文は、結果の状態を発話の根拠として表現するからである。

- (24) a. 次次と木が切られている。
b. ?次次と木が切つてある。
- (25) a. 会場に机が急ピッチで並べられている。
b. ?会場に机が急ピッチで並べてある。

この例文(24)(25)のように、結果を生じる動詞の場合、受動表現のテイルが結果状態を表す場合にのみ置き換えが可能である。逆にテアルと置き換えが可能な場合には、テイルが結果状態を表す場合ということになる。4.1節で見た確認可能な結果を生じない場合でも、受動表現が継続を表す場合も当然置き換えができない。結果を生じる動詞に用いられたテイルは文中の副詞などの成分などによって継続読みと結果状態の読みに分かれるが、上記のように曖昧である。

(条件 C) 動作を表す動詞が結果を残す動詞であれば、I型のテアル構文と受動表現のどちらも用いることができ、それぞれ置き換えができるが、受動表現が継続を表す場合にはテアルとの置き換えができない。

4. 1. 3 動作主の明示

その他の要素として、森田(1977)をはじめ多くの先行研究で指摘されているように、テアル構文には動作主が明示されにくいという特徴がある。特に本稿でいうI型のテアルが用いられたテアル構文には動作主が現れない。寺村(1984)は、このI型のテアル構文の動作主に関して、不明、不問の動作主

であるとしている¹⁴。I型のテアル構文には、ガ格動作主だけでなく、「ニ、ニヨッテ」でも動作主が明示できないことを、齋藤(2008)で以下のようなテストを行い示した。一方、受動表現(27b,c)では、動作主を明示することができる。

- (26) a. *係員が窓が開けてある。
- b. *係員に窓が開けてある。
- c. *係員によって窓が開けてある。
- (27) a. *係員が窓が開けられている。
- b. 係員に窓が開けられている。
- c. 係員によって窓が開けられている。

このように、動作主の明示の可否にI型のテアル構文と受動表現とは違いがある。受動表現（ラレテイル）は、対象の状態が外部からの力によってもたらされたことを表現するものであり、その動作主を確認している場合も確認していない場合でも可能である。一方、I型のテアル構文は、結果から動作が行われたと推論した情報であることを表現し、その動作の結果のみの表現であるからであると思われる。既に指摘したAからCの条件を満たした場合でも、動作主を明示する場合は受動表現に限られる。

（条件D）動作主を明示する場合には、I型のテアル構文は用いることができないが、受動表現は可能である。

4. 2 文の意味内容による選択

次に問題となるのは、条件A-Dによって区別できない場合、つまり動詞が人の動作を表し、結果を生じさせ、結果状態を表し、動作主を明示しない場合である。この場合には、テアルと受動表現とは相互に置き換えが可能であ

¹⁴ ガ格動作主については齋藤(2007)で青空コーパスでのテアルの用例約9800例からは、II型では、ガ格動作主が明示された例が19例あったが、I型にガ格動作主の明示された例はなく、今回の1398例の調査でもガ格の動作主は見つからなかった。

り意味的にもほぼ同じようである。この場合の2つの表現の使い分け、あるいは優先される選択はどのようなものであろうか。寺村(1984:148)は、まず意志的な行為であるか否か、次に事態が尋常な状態か異常な状態であるかによるとし、金水(2009)は意志性を持つか否か、またその行為が行われる理由の存在が明らかになっていることが、使い分けの基準になるとしている(p.277)。

4. 2 推論のしやすさ

受動表現とテアル構文との使い分けに関して、意志的な行為であるか否かを寺村や金水などは挙げており、金水(2009:280)は意志性2をなくすために受動表現が用いられるとしている。しかし、I型のテアル構文に、意志性(金水が言う意志性2)があるとは捉えにくい例文があることが杉村(1996)などで指摘されている¹⁵。この意志性2がないとする例文は次のような例文(28)(29)である。この「忘れる」などは無意志動詞として考えれば、すなわち意志性1がなく、金水が指摘しているように意志性2は当然ないことになる¹⁶。

- (28) a. おや、机の上にカバンが忘れてある。 (杉村 1996:65、(20))
b. おや、机の上にカバンが忘れられている。
- (29) a. 畳の上に彼女の聴診器が置き忘れてあった。
(金水 2009:280 三浦綾子「この土の器をも」初出 益岡 2000:108)
b. 畳の上に彼女の聴診器が置き忘れられていた。

テアル構文と受動表現との使い分けに「意志性2」を求めると、このよう

¹⁵ このような「忘れる」が用いられた用例は、今回の調査でも1例見つかっている。「忘れる」は意志的動詞であるか否かについて、「わざと忘れる」など「わざと」と共起できることから意識的な動作か無意志的動作なのかは判断が難しい。また、原沢(1998:22)は、対応する自動詞のない場合のテアルは非意志的行為によって生じた事態を現前描写的に表現しており、テアルの意志性は不問であるので、この場合の意志性は問題とはならないとしている。

¹⁶ 意志性がないと思われるテアル構文については、杉村(1996、2002)や大場(1996)などの指摘がある。金水(2009:280)は、このような意志性のないテアル構文は、益岡(1987)の分類であるA₁型に限られ、原形としての「存在」の意味に近いとしている。

な「意志性2」のないテアル構文の存在が問題となる。しかし、I型のテアル構文は、結果を基に人による動作が行われたと推論して表現するものであるとの本稿での観点からは何ら問題とはならない。I型のテアル構文は確認した結果の状態から、そのような結果を生じさせる動作が人によって行われたと推論して発話する場合に用いられるのであるから、話し手が結果から人によって動作が行われたと推論さえできれば、「意志性」の有無は問題とならず、無意志と考えられる動作であっても例文(28)(29)のように可能であり、その場合、受動表現も可能である。但し、多くの場合、人の動作は意志的であるからその種の用例が多くなるだけである。

また、以下に挙げる金水の好ましくない結果を表すとしたI型のテアル構文の例文が不自然なのは、その状態が動作によってもたらされた状態の表現として相応しくない、すなわち結果から推論できないからであると言える。推論できるためには、その状態が人の動作によってもたらされたことと捉えられることが必要であると考え¹⁷。

- (30) a. (?)花瓶が割ってある。
b. (?)本が散らかしてある。
c. (?)鍵が壊してある。 (金水 2009:276-276 (10a) (10b) (10c))

いずれの例文も、「割る」「散らかす」「壊す」という動作と「花瓶」「本」「鍵」の存在との関係が不明瞭なためであり、そのため、その不明瞭な点を解消する文脈の支えがあれば可能な表現となるのである。通常、花瓶は割って使うものではなく、本も散らかすものではない。それよりも自然に受け入れられる状況としては、花瓶が割れるのも風や地震などによる場合も考えられる。ところが、人が何らかの目的を持って（例え話し手には目的そのものは解からなくても）行ったと考えられる状況であれば以下(31)(32)のようにテアル構文の使用は可能である。

¹⁷ 例えば例文(28c)が、窃盗犯同士の会話であれば、動作主の発話であるから、直接、その動作を確認したことになり、「鍵を壊してある」となる。

- (31) a. 泥棒が入ったように見せるためだろうか、花瓶が割ってある。
b. 机の上にきちんと積んでおいた本が散らかしてある。
c. なぜか全ての鍵が壊してある。
- (32) a. 花瓶がわざと割ってある。
b. *花瓶がわざと割られている。

また、「割る」や「散らかす」という動詞とガ格名詞（句）との関係が普通考えられる関係であれば、これらの動詞を文脈なしでも以下のように可能である。

- (33) a. 薪が割ってある。
b. おもちゃが散らかしてある。

また、自然の力などで割れた場合や原因がわからない場合には、テイルが用いられる。

- (34) 花瓶が割れている。

しかし、花瓶を気づかずに割ってしまうこともある。その場合はI型のテアル構文では非文となる(34)。

- (35) a. *気付かずに、花瓶が割ってある。
b. *袖を引っ掛けて、花瓶が割ってある。

以上の観察からは、ガ格で示された名詞（句）の状態が動作によってもたらされた状態の表現として相応しくない場合(30)、すなわち結果から推論できないという百科事典的な意味での不自然さがある場合には、その動作が意図的になされたとする文脈などが補われることで自然な文(31)(32)になると考えられる。それは通常は人が行わない動作であっても意図的になされたとすることで、動作と結果の状態の関係づけができるからである。(35)が非文なのは、「気付かずに」割るのは、その「割る」という動作が動作主の動作が

意図的ではないからである。例えば、躓くとか(35b)のように袖が引っ掛かるとかであり、動作主は‘意図的’に「割る」という動作をした訳ではないからであると考えられる。また、(28a)(29a)の意図的でない文が不自然ではないのは、そこにカバンや聴診器があるのは、「忘れた」からであろうと話し手が解釈したからである。これら(28a)(29a)(31)の場合から、意図的であるか否かにかかわらず、ガ格で示された対象という意味役割を担う名詞（句）の存在の仕方と、人の動作の結果によりそのような状態で存在することになったこととの関係づけが可能であればよいと考えられる。

但し、必ずしも物の存在が必要ではなく、確認できる眼前の状態が人の動作によって引き起こされた結果であると推論できればよい。ただ、確認できる結果状態が必要なことから物としての対象が存在する場合の用例が多くなる。そのため、益岡(1987)は、このI型（益岡ではA型）に下位分類を設け、物が存在するA₁型と具体的な存在でないA₂型に分類している。益岡は、この対象が存在というよりは、どのような状態であるかを表すA₂型の例文として以下のような例文を挙げている。

(35) 入り口に近い片すみが一畳余りの広さだけ**あけてある**。

（本多勝一『カナダ・エスキモー』）

(36) 名刺には、岡島久男とあり、左側の住所のところ**は**なぜか墨で黒く消して**あった**。

（松本清張『一年半待て』）（益岡 1987:223、(19)(20)）

さらに、益岡は「磨く」、「洗う」、「あたためる」、「灯ける」などの動詞を挙げて、このことから具体的な存在という結果状態を表すA₁型とより抽象的な結果状態を表すA₂型(35)(36)とに下位分類している。I型のテアル構文には、確認できる結果が必要ということから、結果としての対象の存在がある場合が多く、その確認は視覚によるものが主となるが、杉村(1996)が指摘するように、視覚以外の感覚で捉えられる状態(38)もある。この場合、ガ格名詞（句）が存在するとは言えない。さらに、3.3節で見た例文(15)のような

ガ格で示された名詞そのものは存在しないが、その痕跡だけでも可能なことから、I型のテアル構文は対象の存在を必ずしも必要とはしないが、存在を表す場合が多いといえる。

(37) 彼の部屋はいつもクラシックが**かけてある**。(杉村 1996:65 (14))

(38) (釘の跡を見て)

釘が**打ってある**。(例文 (15) 再掲)

以上のことから、意志性や文の好ましき、対象の存在が問題となっているのではなく、対象となる名詞が表す物の状態と動詞が表す動作との関係に問題があるのである。

ここまでの考察から、A~Dの条件を満たす場合でなければI型のテアル構文を用いることができないが、さらにこれら4つの条件を満たすだけでなく、その動詞が表す動作と変化を蒙る対象の状態との関係が自然な関係であるかにより使い分けられる。

(条件E) A~Dの条件を満たす場合には、I型のテアルと受動表現とが置き換えが可能である。しかし、動詞が表す動作と結果の状態が、通常、人が行うものであると推論できる関係でない、いわゆる百科辞典的な知識に合致しない場合には、I型のテアル構文は使えない。

5. まとめ

本稿では、従来、先行研究でも取り上げられてきた、対象がガ格のテアル構文(本稿でのI型のテアル構文)と受け身のラレル+テイルという形式の受動表現との使い分けについて考察したものである。その結果、I型のテアルにはA~Dの条件を満たさなければならないという制約があり、受動表現にはそのような制約がないことが明らかになった。さらに、I型のテアル構

文には条件 E として結果から動作を想定できるような動作と結果、また、そのガ格で示された物の存在の仕方として通常理解されるかという百科辞典的な知識に基づく自然な関係があるかという意味的な制約があることがわかった。これらの条件は、I 型のテアル構文が、話し手が確認した（多くは視覚による）対象の状態を、人による動作の結果もたらされたと捉え、それを根拠に動作が行われたと推論し発話するものであるため必要となり、これらを満たした場合にのみ I 型のテアル構文が用いられる。

（付記） 本稿は平成 20 年度麗澤大学言語研究センターのプロジェクト「格と主題」（代表研究者：杉浦滋子、坂本比奈子）での考察をもとに発展させたものであり、資料として使用したコーパスデータも同プロジェクトで作成したものである。

主な参考文献

- 一戸克夫 (2001) 「結果構文テアルにおけるアルの存在動詞としての性質」『意味と形のインターフェイス 中右実教授還暦記念論集 上巻』くろしお出版、pp.41-52
- 大場美穂子 (1996) 「「～である」について」『東京大学言語学論集 15』、pp.69-86
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版、pp.184-189
- 金水敏 (2009) 「意志性・主観性と文脈」『語彙の意味と文法』くろしお出版、pp.273-284
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 齋藤茂 (2007) 「「テアル構文」における動作主の動作主の抑制と表示—2 種類の動作主抑制力—」麗澤大学大学院修士論文
- 齋藤茂 (2008) 「テアル構文と対象の格表示」『言語と文明 6』麗澤大学言語研

究科論集、pp.113-136

齋藤茂(2009)「と」による引用節(句)を含むテアル構文の考察—直接確認と
間接確認の違いと統語構造との関連—『日語日文學研究 71号』韓國日
語日文學會、pp.115-134

杉村泰(1996)「形式と意味の研究—テアル構文の2類型—」『日本語教育 91
号』、pp.61-72

杉村泰(2002)「意志性のないテアル構文について」『言語文化論集』第 XXV
巻 第1号

竹沢幸一(2001)「コピュラ動詞アルの二面的語彙特性とその構文的具現」『意
味と形のインターフェイス 中右実教授還暦記念論集 下巻』くろしお出
版、pp.713-724

筑波大学現代言語学研究会編(1997)『ヴォイスに関する比較言語学的研究』
三修社

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版、pp.212-254

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版、pp.147-152

中島孝幸(1999)「結果を表わす構文—テアルとラレテイル—」『三重大学日本
語学文学 10』 pp.45-54

日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法 2—格と構文、ヴォイス』く
ろしお出版、pp.207-298

野村雅昭(1983)「近代語における已然態の表現について」『論集 日本語研究
15 現代語』有精堂出版、pp.152-164

西村義樹(編)(2002)『認知言語学Ⅰ:事象構造』東京大学出版会

原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味—テイル形との関係において—」『日本語
教育 98号』 pp.13-24

原沢伊都夫(2004)「理論と実践の結びつき—テアルの表現形式から—」『静岡
大学留学生センター紀要 1』 静岡大学留学センター、pp.23-37

藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』和泉書院

益岡隆志(1987)『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版、pp.219-235

森田良行 (1977) 『基礎日本語』 角川書店、 pp.51-55

山崎恵 (1992) 「「結果相」の表現に関する一考察—「～ている」「～である」「～られている」「～られてある」—」『富山国際大学紀要 VOL.2』 pp.115-132

鷲尾龍一・三原健一 (1997) 「ヴォイスとアスペクト」 中右実 (編) 『日英比較選書 7』 研究社

ヤコブセン, ウェスリー・M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』 pp.213-48 くろしお出版

リンゼイ・J・ウェイリー (2006) 大堀壽夫 (他) 訳 『言語類型論入門』 岩波書店、 pp.226-227

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*, Oxford University Press.

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*, Cambridge University press.

資料

(1) 今回、調査した資料(1)は、以下の著者 86 名による 110 作品をコーパス化したもので、データに対して EM エディタによる正規表現検索を行い集計したものである。

<小説>

『愛のない部屋』、『OUT 上・下』、『おくりびと』、『オーラの条件』、『隠された鍵』、『神様のくれた涙』、『ガール』、『木もれ陽の町で』、『裁判長！ここは懲役 4 年でどうすか』、『砂糖菓子の弾丸は撃ち抜けない』、『仕掛けられた罪』、『重力ピエロ』、『女子大生会計士の事件簿』、『垂直の死海』、『水恋』、『スクープ』、『臓器農場』、『空の中』、『そろそろくる』、『たまごの緒』、『ダリの繭』、『探偵倶楽部』、『チーム・バチスタの栄光 上・下』、『町長選挙』、『償い』、『東京 DOLL』、『ナラタージュ』、『西の魔女が死んだ』、『犯人たちの部屋』、『ひなた』、『美丘』、『ペルソナ探偵』、『星の見える家』、『無言歌』、『模倣犯 (1)～(5)』、『四畳半神話大系』、『夜は短し歩けよ乙女』、『レオキス』、『恋愛少

女漫画家』、『論理学園事件帳』、『笑う警官』、

＜新書・ブルーバックス＞

『ITリスクの考え方』、『アマテラスの誕生』、『オバマ現象のカラクリ共感の戦略コミュニケーション』、『オバマ・ショック』、『断る力』、『下流社会 第2章 なぜ男は女に“負けた”のか』、『ゲノムサイエンス』、『合コンの社会学』、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』、『進化から見た病気「ダーウィン医学」のすすめ』、『進化しすぎた脳 高校生と語る「大脳生理学」の最前線』、『新・細胞を読む「超」顕微鏡で見る生命の姿』、『すべての経済はバブルに通じる』、『生物と無生物のあいだ』、『退化の進化学』、『中国という世界』、『天然ブスと人工美人とどちらを選びますか?』、『日本人のしきたり』、『人間回復の経済学』、『年収防衛 大恐慌時代に「自分防衛力」をつける』、『ベイシック・インカム入門』、『「もう疲れた」と思ったときに読む本』、『物語韓国の歴史』『「わかりやすい教え方」の技術「教え上手」になるための13のポイント』、

- (2) 目視による分析：『楽園（上・下）』、『世界の中心で愛をさけぶ』
- (3) 青空文庫コーパス：野口英司(2005)『インターネット図書館 青空文庫』はる書房 添付DVDに収録された4843の作品のデータを指す。
- (4) I型・II型で用いられた主な動詞(5例以上)但し動詞「する」(I型17、II型6例)を除く。以下の表のように、用いられる動詞には偏りが見られ、特にI型で顕著である。

＜表1＞

I型で用いられた動詞(対象がガ格のみ)	II型で用いられた動詞(対象がヲ格のみ)
置く98、書く41、はる(貼る・張る)36、飾る16、とめる(停める、止める、留める)13、描く12、並べる9、かける(掛ける)8、立てかける8、据える8、貼り付ける7、敷く6、入れる5、積む5、設ける5、	かける(掛ける)6、とる(取る)5、つける(付ける)5、

(5) I型のテアルとII型のテアルの使用割合

ここでのI型・II型はテアルとラレテイルとの置き換えテスト及び、前後の文脈から区分を行ったものである。なお括弧内は対象の格表示から数えた数である。

<表2>

種類・(作品数)	小説 (87)	新書 (22)	ブルーボックス (5)	合計
使用例総数	1309	73	16	1398
I型 (対象ガ格)	1026 (453)	59 (25)	8 (2)	1093
II型 (対象ヲ格)	283 (106)	14 (5)	8 (8)	305
計	1309	73	16	1398
構成比(%)	96.63	5.22	1.14	